

BATTLE GREEN 14

しかし、日本人をよく知る欧米人たちは、「個人として付き合う日本人はとて礼儀正しくて親切で時間厳守なのに、集団としての日本人は無礼で自己中心的で時間を守らない」と不思議がる。昔のギャグに「赤信号みんなで渡れば怖くない」というのがあったが、日本人の集団心理は「郷に入れば郷に従え」の知恵を打ち消す傾向があるようだ。

先月号で触れたように、アジアからの移民が増えているレキシントン町の状況は、日本人観光客の集団心理に近いかもしれない。まだ移民がほとんどいなかったころレキシントン町に移住したアジア系移民たちは、古くからの住民に受け入れてもらうために誰よりも町に貢献しようとした。しかし、移民の数が膨らみ、町のコミュニティの中で個々のエスニックグループの常識や価値観を共有できる独自のコミュニティを作り上げられる今、移民たちは郷に代わらずとも孤立することはなく、気楽に生きてゆける。

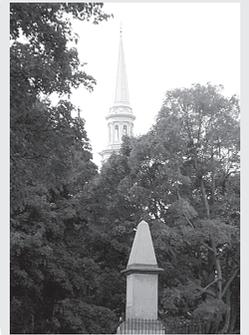
「古い住民の価値観を理解する必要も尊重する必要もない」という新しい住民の態度は、当然のことながら古い住民の神経を逆なでする。たとえそれが無意識や無知によるものであってもだ。

かかいう私もレキシントン町に越してきてしばらくの間は、町のしくみを知る必要も、この町特有の価値観を学ぶ必要も感じなかった。父親が県の職員で母親が小学校の教師だった私は、給料をもらっている専門職の彼らに任せておく日本の常識に従って暮らしていたのである。

バトルグリーン／連載エッセイ14

渡辺 由佳里

コミュニティ意識の解離



「Town Meeting Members」、タウンマネジャーの三つの部門が町を運営している。町の方針を決めるのが行政委員会、予算や条例を決めるのが町議会、そして、行政委員会の監督のもとに直接町政を運営するのがタウンマネジャーである。

もっと驚くのは、町で最も権力がある行政委員と、町の財布を握る町議会議員が全員無給のボランティアだということだ。町民の選挙で選ばれていないタウンマネジャーだけが年収約十萬ドルの専門職で、この町の住民でなくてもよい。

公立学校の運営も、町の行政と同様である。町議会が可決した予算の詳細と学校の方針を決めるのは選挙で選ばれた五人の教育委員 (School Committee Members) だ、小学校から高校までの公立学校の具体的運営の責任者が教育長 (Superintendent) という仕組みだ。

教育委員達は町民のボランティアで、教育長は有給の専門職である。町や学校で問題が発生すると、行政委員や教育委員の自宅の電話はひっきりなしに鳴り、嫌がらせのEメールが殺到し、町の新聞では名指しで攻撃される。予算の時期には家族との団欒は皆無になり、睡眠不足になる。こんなに辛苦の多い仕事を、彼らは無報酬で引き受けているのだ。

ところが、恩恵を受けている私たちのほとんどはそんなことを知ろうともしない。

あるとき香港出身の知人が、物知り顔で私にこうさやいた。「教育委員は偉そうにしているけれど、

小遣いをもうけたいからなるだけ」そこで私は彼らが無報酬のボランティアであることを伝えた。彼女は「それ、本当？」と驚いたものの、すぐに立ち直って自信に満ちた態度で反論した。

「でも、選挙運動の寄付で余った分は自分のものにするのよ。そう聞いたことがある」

彼女の「無報酬とはいえず、きつとどこかに見返りがあるはず」という信念は、どんなに私が試みても揺るぐことはなかった。

ボランティアが町を運営するという観念は、それが無い国で生まれ育った者には理解しがたいものである。だが、ここで問題なのは、彼女の「理解したい」という欲求の欠如である。

かつてレキシントン町の新住民と旧住民との間に存在した、「わかってもらいたい」、「わかりたい」という欲求は、必要がなくなってきたので、急速に消えつつある。この欲求が消えると、住民同士の解離はどんどん広がり、コミュニティ意識とひいては郷土に対する愛情が薄まる。

これは、レキシントン町が直面している問題のひとつである。

★プロフィール★

わたなべ ゆかり・1960年兵庫県生まれ。京都大学医療技術短期大学部卒、同大学部専攻科修了。京都大学医学部付属病院に三年間勤務。その後ロンドン留学、日本語学校のコーディネーター、医療製品製造会社勤務などを経験。2001年『ノーティアーズ』で第七回小説新潮長篇新人賞を受賞。2003年二作目『神たちの誤算』を発表。現在はボストン郊外レキシントン市で夫と娘の三人暮らし。翻訳やエッセイ執筆の日々を送る。

<著者のブログ>
http://watanabeyukari.weblogs.jp/